

解放前中国の社会学の特徴

——社会学の出版物を中心に——

星 明

〔抄 録〕

中国の社会学は欧米や日本から輸入して以来今日まで、すでに1世紀あまりの歴史をもっている。ここでは、その歴史を1900年前後から1948年までの前半期と1949年から現在までの後半期に分けた。前半期は清末期から民国期であり、後半期は共産主義を国是とする新中国建国からはじまる。この前半期は、社会進化論を理論的基礎とするH. スпенサーの社会学を受容して以来、その後半期に較べてはるかに社会学が順調に成長した50年間である。この小論の目的は、その歴史の前半期に中国の社会学が発足から萌芽、揺籃を経て、成長に向かった時期の社会学の特徴を社会学書の出版物をとおして考察することにある。われわれは、この考察をとおして社会学の成長の過程の一事例を知ることができる。

キーワード 中国社会学、中国社会学史、解放前中国、民国期

はじめに：中国の社会学の成長の背景

中国の社会学は欧米や日本から輸入してから今日まで、およそ1世紀の歴史をもっているが、中国の近現代の社会の変動を反映して、その発展は紆余曲折した発展過程を歩んできた。また、新中国建国直後から1979年までの27年間にわたって社会学の研究も教育も停止した。ここでは、新中国の成立以前の社会学書および社会学の刊行物をとおして、当時の社会学の特徴を明らかにする。中国の回復した社会学をいち早く新聞に報告し⁽¹⁾、精力的に中国の社会学界との交流を進めた福武直はかつて解放前の社会学について「・・・中国の社会学は、先輩である日本の社会学が限られた少数の大学ではそばそと講義されたのに比して、1920年代になって急速に発展していった。社会学の概説書も30年代にはかなりの数にのぼったが、とくに私の専門とした農村社会学や社会調査の書物は。その刊行点数において、はるかに日本のそれを上まわっていた・・・」⁽²⁾とか「中国の社会学は、1930年以降大きく開花し、分野によっては日本の社会学以上の業績をあげたとみてよいし、英文の刊行物を通じて、日本社会

表 1-1 中国の教会系 10 大学の社会学教育（1925 年）

大 学	提供講座数	提供履修単位数
Shanghai College（上海滬江大学）	6	18
St. John's University（聖約翰大学）	2	—
Nanking University（金陵大学）	8	40
Fukien Christians University（福建協和大学）	2	9
Hangchow Christians University（杭州之江大学）	2	9
Shantung Christians University（山東齐鲁大学）	11	26
College of Yale-in-China*（長沙雅礼学堂）	5	21
Ginling College（金陵女子文理学院）	3	12
Canton Christians University（広東嶺南大学）	6	18
Yenching University（燕京大学）	31	102

出典：Wong Siu-lun, 1979, *Sociology and Socialism in Contemporary China*, RKP, p. 11。ただし、*印は John Longbreak, 2001 年、耶鲁大学の中国情結，美国思想与生活雑誌，第 4 季刊，美国駐華大使館によって、Yale in China を College of Yale-in-China に訂正した。

表 1-2 社会学系（社会学部）の設置（1913～1929 年）

1913 年	（上海）滬江大学社会学系
1921 年	厦門大学歴史社会学系
1921 年頃	（北京）燕京大学社会学系
1925 年	（上海）復旦大学社会学系，（北京）清華大学社会学系
1926 年	（上海）光華大学
1927 年	中央大学，暨南大学，（上海）大夏大学の各社会学系
1928 年	東北大学社会学系
1929 年	上海労働大学，（開封）中山大学の社会学系
1913～1929 年	安徽大学，福建協和大学，上海中国公学，政法学院などが社会学課程を開設

出典：孫本文，1948 年，当代中国社会学，勝利出版公司，pp. 224-228。韓明謨，1987 年，中国社会学史，天津人民出版社（＝星明訳，2005 年，中国社会学史，行路社，p. 79, pp. 128-129）。鄭杭生・李迎生，2000 年，中国社会学史新編，高等教育出版社，p. 67。その後，「・・・1940 年になって国民党政府が社会部を設置し，ソーシャル・ワークおよび社会福祉の事業をすすめたので，再び社会学部が増えてきた。当時の在學生は 600 名余りで，1947 年の秋には全国の総合大学ないし単科大学で社会学部が 19 校，歴史社会学部 2 校，社会事業行政学部 1 校の合計 22 校があった。それらは次のようである。中央大学，清華大学，中山大学，復旦大学，雲南大学，金陵大学，燕京大学，滬江大学，嶺南大学，華西大学，東吳大学，光華大学，輔仁大学，震旦大学，珠海大学，金陵女子文理学院，広東法商学院，鄉村建設学院，広州法学院の 19 校が社会学部を設置，大夏大学，齐鲁大学が歴史社会学部を設置，社会教育学院が社会事業行政学部を設置していた。これは解放前の社会学部の設置のピークであり，そのなかの半数は教会系の大学に設置されていた。大学で社会学の講師以上の教員は約 140 名であった」（韓明謨，同訳書，p. 129）。なお，龍冠海の「国内各大学社会学課程調査」（龍冠海，1937 年，国内各大学社会学課程調査，社会学刊，第 5 卷第 3 期，中国社会学社，pp. 41-45）によれば社会学部の再編成などがみられる（16 大学の社会学部の概況について，独立学部をもつ大学が 8 校，すなわち清華大学，中央大学，燕京大学，金陵大学，金陵女子大学，滬江大学，光華大学，大夏大学。社会学部が歴史学部と合併された大学，すなわち厦門大学，福建協和大学，齐鲁大学。社会科学部と合併された大学，すなわち嶺南大学と北平師範大学。社会経済学部と合併された北平輔仁大学。農業経済学部と合併された浙江大学。哲学部と合併された中央大学）。

学よりも，はるかに国際的に知られるようになっていった」⁽³⁾と述べている。中国の社会学史に関する多くの著作をもつ韓明謨は近著『中国社会学名家』⁽⁴⁾（2005 年）のなかで，中国の社会学の樹立に突出して貢献した 4 人の社会学者をあげている。すなわち，孫本文，陳達，

潘光旦そして費孝通である⁽⁵⁾。

解放前の中国の社会学が世界的に知られていた背景には次のような要因があると考えられる。1) 欧米の教会系大学での社会学部の設置 (表 1-1 参照) やその他の大学での社会学部の設置 (表 1-2 参照)。2) 欧米へ留学生を送りだしたこと。孫本文の 1947 年の調査によれば、中国の各大学の社会学の教員の総計 145 名のうち、アメリカ留学 74 名、フランス留学 11 名、日本留学 10 名、イギリス留学 9 名、ドイツ留学 4 名、ベルギー留学 1 名であり、またアメリカ人の教授 8 名、留学経験なし 28 名であった⁽⁶⁾。社会学の教員のいかに多くが留学経験者であることがわかる。清華大学は外国留学の経験のないものは教授になれなかったという (北山康夫, 注⁽⁴⁰⁾論文)。3) 世界的に著名な社会学者の招聘, たとえば農村社会学者の白德菲 (1919 年訪中), 人口学者の W. S. トムソンと社会学者 E. A. ロス (1930 年, 南京の金陵大学で講義), 社会人類学者のラドクリフ・ブラウン (1935 年, 燕京大学社会学部で講義) および R. E. パーク (1932 年, 燕京大学社会学部で講義。その他にも中国政治学会, 中国社会学社北平分社, 清華大学および燕京大学などで 10 数回の講演) らの招聘である⁽⁷⁾。4) 社会学の学術団体の設立と刊行物の発行。たとえば, 中国社会学会とその刊行物「社会学雑誌」の発行, 燕京大学社会学会とその刊行物「社会学界」および中国社会学社⁽⁸⁾ (元東南社会学会) とその刊行物「社会学刊」などである。

1. 解放前の社会学の発展区分

ここでいう解放前の社会学とは, 中国における 1891 年から 1948 年までのほぼ 50 年間の社会学をいう。1891 年は康有為がその年に, 広州に創立した学校のカリキュラム表に「群学」(sociology の漢語訳) がみられる年であり, 1948 年は新中国の成立の前年である。解放前であるからその最終年は 1948 年でよいとしても, 中国の社会学のスタートをいつにするかは論者の視点によって意見が分かれる。しかし, 韓明謨がいうように「歴史を遡ればわかるように, どの学問の発生, 発展も, しばしばその学問の発生, 発展時期の人類の歴史の進行過程, とくにその学問の所在地とその社会の歴史発展過程のなかの, 特定の歴史的条件と相互に関連しているし, また一般的には同時代のほかの学問の発展とも相互に関連している。中国の社会学の発生, 発展の歴史は, とりわけそうであった。中国の社会学の発生, 発展はアヘン戦争からこのかたの中国と密接に関わっている。中国の社会学の発生, 発展は, 中国が次第に半植民地・半封建国家に転落したなかで, 中国人民が帝国主義の侵略に対して攻撃を起し, 封建王朝の統治を打倒するために立ち上がった一つ一つの革命と切り離すことはできない」⁽⁹⁾。韓明謨はこのように当該社会での学問の成立とその社会の状況との基本的なかわりを述べたうえで, 中国の社会学の歴史的な発展区分を行なった社会学者らの共通点を次のように挙げている。すなわち, 「かれはみな中国の社会学は嚴復が翻訳した『群学肄言』をもってはじまり,

1911年の辛亥革命、1919年の五・四運動および30年代の社会学の活気が中国の社会学の発展の歴史を区分するキー・ポイントとなる時期であるとみなしていることである」⁽¹⁰⁾と。韓明謨は、解放前の社会学の歴史区分を論じた李劍華⁽¹¹⁾、蔡毓驄⁽¹²⁾、楊堃、孫本文、黃紹倫らの視点の問題点を次のように述べている。つまり、「1. 多くは大学の社会学の発展を偏重しているか、そのみを議論している。大学以外について、さらに広い範囲の社会学の発展の歴史についての論及は非常に少ないか、まったく触れられていない。2. いくつかの区分、たとえば李劍華や楊堃の区分は30年代、40年代のものであり、現在からみれば完全なものではない。3. マルクス主義社会学の内容については、一般的に敵視した態度をとるか、その価値を低いものとしている」⁽¹³⁾としている。かれがこの問題点を指摘するのも、かれ自身の視点に由来するものである。すなわち、1) 韓自身がマルクス主義、史的唯物論の観点をもつこと、2) 韓が大学における研究教育活動以外の社会的、教育的、実践的な活動も、たとえば革命根拠地や解放区の社会調査、中国社会の性質の問題などの論戦および郷村建設運動を社会学の歴史の範疇に入れていることである⁽¹⁴⁾。

それでは、韓明謨はどのように区分しているのであろうか。かれは解放前の中国の社会学の発展の歴史を次の4段階に区分している⁽¹⁵⁾。すなわち、第1段階の発足期（1891～1910年）、第2段階の萌芽期（1911～1918年）、第3段階の揺籃期（1919～1927年）、第4段階の成長期（1928～1949年）である。1891年を中国の社会学のスタートの年としている論者は韓明謨、張琢⁽¹⁶⁾、劉緒胎⁽¹⁷⁾、龍冠海⁽¹⁸⁾らである。筆者はかつて、中国の社会学史の区分を論じた時、「・・・、この1世紀の発展の軌跡を中国の社会学者がどのように区分しているか・・・。かれらの間にも中国の社会学の始まりをどの時期におくかはさまざまである。たとえば、ある論者は1891年の康有為が万木草堂で行なった「群学」の講義をもって中国の社会学のスタートとするが、ある論者によれば、これは講義科目の一覧だけで実際に講義が行なわれたという証拠はなく、また、たとえ行なわれたとしてもヨーロッパの社会学の原型からほど遠い内容だという。だから、中国の社会学のスタートは厳復がH・スペンサーの社会学の1章『砭愚』（Our need of it）、2章『倡学』（Is there a social sciences?）を翻訳して、新聞『国聞報』紙上に発表した1897年であるとする。このように、スタートの時期が異なれば、当然その発展をどのように区分するかについても意見が分かれる。社会学をどう定義するか、また、社会学を『中国の社会学』とみるか、あるいは『中国社会学』とみるかはさまざまである。さらに、ある論者は社会学と時代背景との関連を強調する。たとえば、1911年の辛亥革命、1919年の五・四運動、1930年の中国社会学社の成立、1937年の日中戦争、1949年の中華人民共和国の成立などである。また他の論者は中国社会学それ自身の特徴を強調する。台湾の社会学も考察の対象にしている論者もいるし、また日本との関係に触れている者もいる。しかし、どの論者にとっても共通しているのは、社会学は外国から輸入された学問であるということである。そして、多くの社会学者は1930年（中国社会学社の設立）、あるいはその前後

をもって『中国社会学』の成立とみている点は共通している。もちろん、中国社会学といっても欧米のオーソドックスな社会学を強調する者もいれば、マルクス主義社会学を強調する者もいる。大雑把ないいかたをすれば、前者は新中国成立以前の社会学者に優位な考え方であり、後者は1979年以後に社会学者になった、あるいは社会学者に復帰した社会学者に支配的な考えである⁽¹⁹⁾と述べた。この考えはいまも変わらない。また、一つの学問が外国から伝わり、国内に一定伝播し（これらは論者によって胚胎期・発育期とか、移植期・萌芽期とか、輸入期・移植期・萌芽期とか表現されている）、その国の社会学になるにはほぼ30年という時間が必要だと思っている。

ここでは、韓明謨の区分を援用し、各段階の社会学の概略をみてみたい。第1段階（1891～1910年）は清朝末期で、社会学は啓蒙期にあった。1891年はうえて触れたように康有為が広州の長興里で長興学舎を創立した年であり、その教学計画に群学の時間割があることから、韓明謨、張琢、劉緒胎、龍冠海らが1891年を中国の社会学のスタートの年としている。中国の社会学の先駆者である康有為、梁啓超、譚嗣同、章太炎らが活躍した時期である。黄紹倫はほぼこの時期を端的に移植段階で、かつ翻訳書の段階だという⁽²⁰⁾。第2段階（1911～1918年）は辛亥革命が起こり、清朝が倒されて、民国期の新たな時代に入った。社会学は学問として専門的な教育機関で教育、研究されるようになってきた。京師法政学堂、京師大学堂（1898年、光緒24年創立）を経て、国立北京大学（1912年、民国元年創立）と改名された中国の経営する大学をはじめ、聖約翰大学、清華学校、滬江大学に社会学の課程や社会学部が誕生した時期である。第3段階（1919～1927年）には社会学の学会（「中国社会学会」）が成立し、同学会から雑誌が創刊されたり（「社会学雑誌」）、大学からも雑誌が創刊されたりした（「燕京大学社会学部」の「社会学界」）。また、中国共産党が運営する「上海大学」（1922年創立、1927年国民党によって閉鎖される）に社会学部が設置された（1923年）。マルクス主義の観点から、また社会学の観点のフィールド調査活動も盛んになってきた。第4段階（1928～1948年）は20年間である。韓明謨はその著「中国社会学史」（1987年）の本文12章、204ページのなかで、実に6章、108ページをこの段階を述べることに費やしている。その内容は革命根拠地と解放区の社会調査、中国社会の性質・中国社会史・中国農村社会の性質についての論戦、大学と研究組織の社会学の発展、大学のなかの代表的な社会学者：孫本文と陳達、大学と研究組織の社会調査研究、鄉村建設運動である⁽²¹⁾。

2. 解放前の社会学の翻訳書と主要著作

孫本文は1947年までの欧米の社会学書の中国語訳を約50冊あげているが⁽²²⁾、韓明謨は1948年以前における世界的に著名な社会学書の中国語訳として27冊をあげている⁽²³⁾。それらを社会学の歴史区分によって再分類すると次のようになる。

解放前中国の社会学の特徴（星 明）

表 3-1 歴史区分別にみた世界的に著名な社会学書の中国語訳リスト

著 者 訳 者	原著発行年 訳書発行年	書 名 訳 書 名	出版社
第 1 段階・発足期 (1891～1910 年)			
H. Spencer ①嚴復	1843 1903	<i>The Study of Sociology</i> 群学肄言	商務印書館
H. Spencer ②馬君武	1876～1898 1903	<i>Principles of Sociology</i> 社会学原理	不明
F. H. Giddings ③吳建常 (日本の市川源三訳, 1901, 社会学提綱, 普及社からの重訳)	1897 1903	<i>Theory of Socialization</i> 社会学提綱	不明
C. H. Ellwood ④趙作雄	1910 1910	<i>Sociology and Modern Social Problems</i> 社会学及社会問題	商務印書館
第 2 段階・萌芽期 (1911～1918 年)			
該当書なし			
第 3 段階・揺籃期 (1919～1927 年)			
C. LeBon ①吳旭初 ②鍾建閔	1895 1920 1920	<i>Psychologie des Foules</i> 群衆心理 群衆	商務印書館 泰東書局
W. McDougall ③劉延陵	1908 1922	<i>An Introduction to Social Psychology</i> 社会心理学緒論	商務印書館
Lewis H. Morgan ④蔡和森編訳	1877 1924	<i>Ancient Society</i> 社会進化論	民智書局
E. Durkheim ⑤許德珩	1893 1925	<i>De la division du travail social</i> 社会学方法論	商務印書館
第 4 段階・成長期 (1928～1948 年)			
Lewis H. Morgan ①楊東純ほか訳	1877 1929	<i>Ancient Society</i> 古代社会	昆侖書店
F. H. Allport ②趙演	1924 1931	<i>Social Psychology</i> 社会学心理学	商務印書館
P. A. Sorokin ③鍾兆麟	1927 1932	<i>Social Mobility</i> 社会變動論	世界書局
E. S. Bogardus ④鍾兆麟	1922 1932	<i>A History of Social Thought</i> 社会思想史	世界書局
Theodore Abel ⑤黃凌霜	1929 1932	<i>Systematic Sociology in Germany</i> 系統社会学	華通書局
J. L. Gillin & F. W. Blackmarl ⑥周谷城	1915 1933	<i>Element of Sociology</i> 社会学大綱	大東書局
E. Durkheim ⑦王力	1893 1935	<i>De la division du travail social</i> 社会分工論	商務印書館
R. H. Lowie ⑧呂叔湘	1920 1935	<i>Primitive Society</i> 初民社会	商務印書館
P. A. Sorokin ⑨黃文山	1928 1935	<i>Contemporary Sociological Theories</i> 当代社会学説	商務印書館
W. F. Ogburn ⑩費孝通・王同恵	1922 1935	<i>Social Change</i> 社会變動	商務印書館
J. L. Gillin & F. W. Blackmarl ⑪吳澤霖・陸德音	1915 1937	<i>Element of Sociology</i> 白二氏社会学大綱	世界書局
E. S. Bogardus ⑫徐卓英・顔潤卿	1932 1937	<i>A History of Social Thought</i> 社会思想史	商務印書館
B. Malinowski ⑬李安宅	1927 1937	<i>Sex and Repression in Savage Society</i> 两性社会学	商務印書館
J. L. Gillin & F. W. Blackmarl ⑭陶集勤	1915 1942	<i>Element of Sociology</i> 社会学原理	新文化書店
K. Mannheim ⑮李安宅	1929 1944	<i>Ideologie und Utopie</i> 知識社会学	商務印書館
B. Malinowski et al. ⑯費孝通	1928 1944	<i>On Culture</i> 文化論	商務印書館
そ の 他			
中国語訳の出版年不明 F. C. Müller-Lyer ①陶孟和部分訳不明	1920 不明	<i>The History of Social Development</i> 文化的変象, 進歩的趨向 (原書 8 冊のなかの 2 冊)	不明
F. Tönnies ②楊正宇 (日本の波多野鼎の部分訳からの重訳)	1887 不明	<i>Gemeinschaft und Gesellschaft</i> 共同社会与利益社会	太平洋書局

出典：韓明謨著，1987 年，中国社会学史，天津人民出版社（＝星明訳，2005 年，中国社会学史，行路社，pp. 137-140）。
なお，翻訳原書には一部欠けていた出版年，出版社，書名などをイギリスの Oxford Libraries Information System,
アメリカの Library of Congress Online Catalog, 中国の上海図書館上海科学技術情報研究所の書目検索・書刊検索,
清華大学図書館蔵目録，北京大学図書館蔵目録および日本の NDL-OPAC や NACSISWebcat で補った。

うえの表にみられるように、翻訳の出版年不明2冊を除くと、25冊のなかで第1段階が4冊(16%)、第2段階が0冊、第3段階が5冊(20%)、第4段階が16冊(64%)であり、世界の著名な社会学書の翻訳は1928年から1948年までの第4段階に集中していることがわかる。この主たる要因は、留学生の帰国、学会の設立、大学の社会学部の増加などである。

ここで、比較のために、日本の社会学書からの中国語訳の状況をみてみたい。

表3-2 歴史区分別にみた日本の社会学書の中国語訳リスト

著者 訳者	原著発行年 訳書発行年	書名 訳書名	出版社
第1段階・発足期 (1891～1910年)			
岸本能武太	1900	社会学	大日本図書
①章炳麟	1902	社会学	広智書局
有賀長雄	1884	族制進化論	牧野書房
②訳者名なし	1902	族制進化論	上海広智書局
F. H. Giddings	1897	<i>The Theory of Socialization</i>	
市川源三	1901	社会学提綱	普及社
③呉建常	1903	社会学提綱	不明
著者不明	1903	社会学	上海作新社
④訳者名なし			
著者不明	1903	社会学原理	上海国民日報
⑤訳者名なし			掲載
建部遜吾	1904	理論普通社会学綱領	金港堂
⑥湯一鵬	1907	社会学	不明
第2段階・萌芽期 (1911～1918年)			
遠藤隆吉	1901	社会学 (哲学館第14学年度高等学科講義録)	
①欧陽鈞	1911	社会学	
第3段階・揺籃期 (1919～1927年)			
遠藤隆吉	1907	近世社会学	成美堂
①賈寿公	1920	近世社会学	泰東書局
第4段階・成長期 (1928～1948年)			
加田哲二		近世社会学成立史	
①李培天	1929	近世社会学成立史	啓智書局
加田哲二	1928		
②劉叔琴	1930	社会学概論	開明書局
高田保馬			
③杜季光	1930	社会学総論	商務印書館
関榮吉	1929	文化社会学概論	東京堂
④張資平・楊逸棠	1930	文化社会学	樂群書店
高田保馬	1922	社会学概論	
⑤伍紹垣	1931	社会学概論	華通書局
米田庄太郎			
⑥林肇民	1931	都市論	新生命書局
新明正道	1935	国民革命の社会学 (最近経済問題叢書, 第1)	甲文堂書店
⑦袁業裕	1938	国民革命之社会学	商務印書館
鈴木栄太郎	1933	農村社会学史	刀江書院
⑧韓雲波	1944	農村社会学史	正中書局
その他			
中国語訳の出版年不明			
F. Tönnies	1887	<i>Gemeinschaft und Gesellschaft</i>	
波多野鼎	不明	不明	
楊玉宇	不明	共同社会と利益社会	太平洋書局
那須皓	1924	農村問題と社会理想	岩波書店
劉鈞	不明	農村問題与社会思想	神州国光社

出典：孫本文，1948年，当代中国社会学，勝利出版公司の付録「中国社会学重要文献分類簡表」(pp. 287-318)，韓明謨著，1987年，中国社会学史，天津人民出版社 (= 星明訳，2005年，中国社会学史，行路社，pp. 59-60)，楊雅彬『中国社会学史』，1987年，山東人民出版社，p. 27から作表。さらに，中国の上海図書館上海科学技術情報研究所書目検索・書刊検索，清華大学図書館館蔵目録，北京大学図書館館蔵目録および日本のNDL-OPACやNACSISWebcatで補った。

うえの表3-2の日本語から中国語訳の社会学書16冊(出版年不明訳書2冊を除く)をみると，第1段階が6冊(37.5%)，第2段階と第3段階がそれぞれ1冊(各6.3%)，第4段階が

8冊（50％）である。表3-1と比較すると、第1段階では翻訳の比率は世界の社会学書より、日本の社会学書のものが高く（世界16％、日本37.5％）、第4段階では逆に、日本の社会学書より、世界の社会学書のものが高い（世界64％、日本50％）。これは、中国の社会学の初期の段階においては、日本の社会学の影響を受けているが、成長期になるとむしろ欧米の社会学の影響を強く受けていることをあらわしている。黄紹倫そして李漢林らは、中国の社会学者の留学経験者を東洋派（日本留学）と西洋派（欧米留学）に区分しているが⁽²⁴⁾、その区分によれば東洋派と西洋派の並存から、次第に西洋派が主流になっていたといえる。

これらの翻訳以外にも、中国の社会学者自らが主に教材として次のような系統的な叢書の出版を行なった。これは孫本文が「当時の大学でテキストや参考書とする社会学の書物が非常に少なく、しかし一人の力量ではできないがゆえに、社会学の同人に要請し、その協力によってできたものである」⁽²⁵⁾と述べているような背景があった。この叢書は孫本文が当時の著名な社会学者の呉景超、游嘉徳、黄凌霜、楊開道、壽勉成、李劍華、潘菽、黄国璋、呉澤霖の9名を招聘して編集したものである。

表3-3 社会学叢書リスト

第1種	社会学の領域	孫本文著
第2種	社会的文化基礎	孫本文著
第3種	社会的心理基礎	潘菽著
第4種	社会的経済基礎	壽勉成著
第5種	社会的生物基礎	呉景超著
第6種	社会的地理基礎	黄国璋著
第7種	社会組織	呉景超著
第8種	社会変遷	孫本文著
第9種	社会進化	黄凌霜著
第10種	社会約制	呉澤霖著
第11種	農村社会学	楊開道著
第12種	都市社会学	呉景超著
第13種	社会学史綱	李劍華著
第14種	社会研究法	楊開道著
第15種	人類起源	游嘉徳著

出典：孫本文，1948年，当代中国社会学，勝利出版公司，pp. 34-35。この叢書は世界書局から1929年から1930年の間に出版された。

表3-4 解放前の社会学の主要著作の分類

分野	冊数	%
1. 普通社会学	44	13.6
2. 社会進化と社会変動	19	5.9
3. 社会問題	90	27.9
甲，通論	(18)	(5.6)
乙，人口問題	(27)	(8.4)
丙，家族問題	(14)	(4.3)
丁，労働者問題	(9)	(2.8)
戊，農村問題	(11)	(3.4)
そのほかの問題	(11)	(3.4)
4. 社会心理学	21	6.5
5. 社会思想と社会学史	19	5.9
甲，社会思想	(8)	(2.5)
乙，社会学史	(11)	(3.4)
6. 農村社会学	8	2.5
7. 都市社会学	9	2.8
8. 社会学方法	20	6.2
9. 社会事業と社会行政	25	7.7
10. そのほかの社会学研究	23	7.1
11. 社会実地調査	45	13.9
計	323	100.0

出典：韓明謨著，1987年，中国社会学史，天津人民出版社（＝星明訳，2005年，中国社会学史，行路社，pp. 136-137）。なお、この表は韓明謨が孫本文，1948年，当代中国社会学，勝利出版会社の付録「中国社会学重要文献分類簡表」（pp. 287-318）をもとにして作成したものであり、マルクス主義社会学の著作は含まれていない。

3. 解放前の社会学会と社会学雑誌の刊行

1) 社会学雑誌

この雑誌は1920年代に中国社会学会⁽²⁶⁾によって出版された。1922年2月に北京で創刊。余天休（当時、北京師範大学社会学部教授）が編集にあたった。社会学者の許仕廉、朱友漁、黄文山、胡鑑民、李劍華、陳達およびアメリカの社会学者 J. S. パージェスなど20名余りが前後して編集にあたった。1922年3月から1925年8月までに2巻8冊を、上海商務印書館から隔月で刊行した。1930年1月からは、余天休の西安中山大学への異動にともなって、同校で第3巻第1期から3期⁽²⁷⁾を出版した。以後、山東齊魯大学から出版された。1933年3月、第5巻第7期をだして停刊になった⁽²⁸⁾。全巻に掲載された論文は160編余りで、その内容は社会思想、社会学の一般理論、各領域の社会学および人口学、民族学、民俗学、ソーシャル・ワーク（社会工作）などが含まれていた⁽²⁹⁾。

この社会学雑誌およびそれを主宰した余天休についての韓明謨は次のように述べている。「・・・1922年2月、留学から帰国した余天休が北京で『中国社会学会』を組織し、同時に『社会学雑誌』を創刊し、上海商務印書館から出版した。余天休は20年代の中国の社会学の草創期にかなり活躍した人物である。かれが結成した中国社会学会は、実際にはごく少数のメンバーがいたにすぎなかった。かれが創刊した『社会学雑誌』は、実際にはかれ一人によって編集されていた。かれは北京にいる時、東方大学を設立し、辺境地域を殖産する人材を養成した。1930年、西安に行き中山大学を開設し、学長になり、間もなくまた齊魯大学の教授になった。かれが創刊した『社会学雑誌』は隔月刊であり、最初の2巻は北京で発行された（上海商務印書館からの出版）。全部で8冊刊行され、期間は1922年3月から1925年8月であり、第3巻は1930年になって、余本人が北京から西安に移ったことにより西安で、また第4巻はかれが済南に移ったことにより済南で発行された。1932年11月に、第5巻4号で打ち切られたが、前後して11年、時間は相当長きにわたったが、社会学の発展にとって、価値ある論文をだしたかという点、その後にはだされた社会学の刊行物には及ばなかった。余天休本人は前後して15冊の著作があると吹聴したが、初期の中国の社会学界でいささかの地位ももっていない。余天休の思想は、『社会学雑誌』の第1巻第1号でみると、その冒頭に要点が次のように述べられている。『現在、多くの人が外国のものを中国に取り入れているが、一切合切をうのみにしており、少しも研究を加えない。これは中国のもっとも不幸なことである。また、多くの人が中国の社会情勢に対しても注意を払っていない。研究の側面からも分析を加える技量がなく、意外にも『社会主義』、『労農主義』、『工団主義』、『共產主義』、『無政府主義』および『職業組合主義』等々といったような各種の主義に見分けがつかなかった。・・・一種の「中国主義」(Chinaism)を生みださねばならない」と。ここからわかるように、余天休は

社会主義、共産主義には反対であった。この思想は、五・四運動以後の中国では遅れたものである。同時に、余天休本人にはどんな高い水準の著作もない。したがって、かれは初期の社会学界で活躍したけれども、その影響はさして大きくなかった」⁽³⁰⁾。余天休に対する韓明謨の評価は決して高くないけれども、鄭杭生・李迎生は「・・・余天休はわが国で社会学の研究を提唱したもっとも初期の一人であり、・・・中国の初期の社会学の発展に一定の貢献をした・・・」⁽³¹⁾と、また「余天休が組織した中国社会学会は当時の政治的圧力およびかれ自身の原因によって行き詰まった後、中国の社会学界は再び共同研究機構のない状況となった。余が組織した社会学会に意義という点からみれば有名無実だけれども、決してはじめからおわりまで決して社会学者に影響を与えなかったわけではない」⁽³²⁾と余天休とかれの主宰した中国社会学会に対して一定の評価をしている。実際、中国社会学史の著書をもつ楊雅彬も「1920年初期の中国の社会学界は実力はいまだかなり弱かったし、加えて当時の北京政府の要人たちは社会学を社会主義だと誤って考えて大きな干渉を加えた。新たに成立した中国社会学会は歩みが困難であった。出版経費も足りず、読者も非常に少ない。学会のさまざまな活動は最終的には中止あるいは中途にならざるを得なかった。しかし、中国社会学会と余天休が中国の社会学の活動を進めるために行なった努力はやはり肯定されるべきである」⁽³³⁾という。

2) 社会学界

「この雑誌は、燕京大学社会学会がはじめた社会学の年刊である。燕京大学社会学部主任許仕廉が主編者であった。1927年6月の創刊で1938年6月の停刊までに、全部で10巻だされた。この刊の主旨は『一つは社会学雑誌の停刊をみて、それを継続する使命を担うためであり、二つは中国の社会学者に中国の社会学の材料を整理する仕事をしてもらって、自国の社会学を研究したい人びとに活躍の場をもたせるためである』（『社会学界』第1巻「編輯者言」）。『社会学界』は全部で137編が掲載されており、その内容は社会学理論、国内外の社会思想史、外国の最近の社会学の著作の翻訳や紹介、社会問題、各種の社会実地研究報告、社会学教育の詳細な討議、社会学の学会動態などである。第1巻には、梁啓超の『社会学在中国方面的幾個重要問題研究举例』、馮友蘭の『中国社会之倫理』、李景漢の『中国社会調査運動』などの比較的高い学術的価値をもつ論文が掲載されており、以後各巻はすべて一定の学術的な特色を維持していた。第9巻はイギリスの機能主義の創始者にして、人類学者のラドクリフ・ブラウン教授が来中して講義をしたものの「特輯」であり、比較的全面的にブラウン教授と機能主義の学説を紹介しており、中国の社会学の発展にとって一定の影響を及ぼした。この雑誌はまた一連の実地調査研究報告を大きく取りあげ、とくに中華平民教育促進会定県実験区および燕京大学清河実験区の詳細な状況およびその研究成果を紹介しており、中国農村と集鎮に関する調査研究の貴重な資料が蓄積された」⁽³⁴⁾。

表4-1 社会学界, 第1卷 (1927年6月, 燕京大学社会学会) 掲載論文目録

目次	
論著	
社会学在中国方面幾個重要問題研究举例	梁任公
中国之社会倫理	馮友蘭
中国民族之研究	王桐齡
中外文化接触之研究	劉 強
中国社会調查運動	李景漢
国内重要工会の概況	陳 達
介紹衛中先生学説	梁漱冥
周易中之社会哲学	常乃惠
中国輓近社会思想之变遷	俞頌華
歴代刑律沿革之概略	玉文豹
中国歴史上の幾個安那其者	邊燮清
社会個案服務與中国	于恩德
中国衛生芻議	黃子方
現行婚制之錯誤及男女關係之将来	許地山
日本之社会学界	李劍華
社会学界消息	
付録——燕大社会学会及其工作	
編輯者言	

表4-2 社会学界, 第10卷 (1938年6月, 燕京大学社会学部編輯) 掲載論文目録

目次	
漢語和中国思想正在怎樣的改变	陸志韋
思想言語與文化	張東蓀
孟漢論知識社会学	李安宅
文化論	マリノフスキ
文化表格說明 (附文化表格)	吳文藻
中国農村社会団結性的研究——一個方法論的建議—(35)	レイモンド・ファース
モース教授の社会学学説與方法論	楊 堃
社区人口の研究	趙承信
清河村鎮社区——一個初步研究報告—	黃 迪
編後語	
附録一 本系工作報告	
附録二 本卷論文西語提要	

3) 社会学刊

「この雑誌は1929年7月に東南社会学会⁽³⁶⁾によって創刊された。主編は孫本文である。この雑誌は社会問題を研究し、學術的論議を展開することを主旨とした。第1巻第1から4期は、東南社会学会の編輯であり、第2巻第1期から中国社会学社の編輯に変わり、全国的規模の社会学界の學術刊行物になった。この雑誌は第5巻3期をだした後に、抗日戦争の勃発によって停刊になった。1948年1月に復刊後、わずかに通年合刊の第6巻をだしただけで、その後は再刊されなかった。この雑誌は全部で6巻20期出版され、論稿300編余り、字数185万字余りが掲載された。その内容は論文115編、外国の社会学説の紹介15編でこの2つの文字数で3分の2を占めている。このほかに、社会学者の伝記5編、書評115編、社会調査4編、その他の文章50編あまりであり、この雑誌の出版発行は中国の社会学の建設と學術研究に対して、重要な推進作用を及ぼした」⁽³⁷⁾。

ここで、筆者がこれまでに収集してきた社会学刊のうち、創刊号の第1巻第1期、上海地

表 4-3 社会学刊，第 1 卷第 1 期（1929 年 7 月，東南社会学会）掲載論文目録

目次	
論著	
社会科学的方法	劉国鈞
社会進化論与社会輪化論	黄决霜
強者と弱者の変態心理	吳澤霖
社会学在科学上的地位	李劍華
社会問題の性質	朱亦松
如何發展中国之社会事業	龔賢明
社会個案方法對於学校訓育上之貢獻	錢振亜
對於改良曆書的一個意見	馬 達
学説	
孫末南 (Sumner, W. G.) 伝	吳景超
孫末南 (Sumner, W. G.) の学説及其對於社会学的貢獻	孫本文
孫末南 (Sumner, W. G.) 与愷萊的社会学	游嘉德
林希元之荒政政策	唐慶增
書評	
L. K. Tao, <i>Livelihood in Peking: an Analysis of the Budgets of Sixty Families</i>	吳景超
Walter H. Mallory, <i>China: Land of Famine</i>	吳景超
E. R. Groves and W. F. Ogburn, <i>American Marriage and Family Relationships</i>	吳景超
Willystine Goodsell, <i>Problems of Family</i>	吳景超
社会学 ABC (孫本文著)	李劍華
Jerome Davis, Harry E. Barnes and Others, <i>An Introduction to Sociology</i>	孫本文
Frank H. Hankins, <i>An Introduction to the Study of Sociology</i>	孫本文
Rudolph M. Binder, <i>Principles of Sociology</i>	孫本文
社会学消息	
東南社会学会紀事	

表 4-4 社会学刊，第 2 卷第 1 期（1930 年 10 月，中国社会学社）掲載論文目録

目次	
論著	
人類生活的一種分類法	黄国璋
「人權」一個社会的解剖	楊開道
社会研究及社会測驗在中国之討論	應成一
1929 年上海工廠工人實際收入額統計	毛起鵠
学説	
霍布浩斯 (Hobhouse, L.) の社会学説	李劍華
書評	
滕更的種族與人口問題	吳景超
1927 年世界人口會議論文集	吳景超
佛蘭司起的國際移民	吳景超
沙羅金 (Sorokin, P. A.) 與齊麥門 (Zimmerman, C. C.) 合著鄉村都市社会学	吳景超
董時進的食料與人口	吳景超
許仕廉的中国人口問題	吳景超
施屈來登的國際行為的社会心理	吳澤霖
何佛梅的民族誌	孫本文
海芝勒的社会制度	孫本文
崔載陽的近世 6 大家社会学	李劍華
圖爾格姆的道德教育	胡鑑民
布葛雷的価値進化論	胡鑑民
陳翰笙等的黑龍江流域的農民與地主	江文漢
陳翰笙等的難民的東北流亡	江文漢
言心哲的社会調查大綱	蔡毓驄
司徒瑞士的人類與機械	嚴景珊
介紹	
外国社会学雜誌要目介紹	劉 渠
消息	
社会学界消息	
中国社会学社記事	

表4-5 社会学刊, 第5巻第3期(1937年4月, 中国社会学社)掲載論文目録

目次	
中国社会組織強化問題之検討	柯象峯
社区研究與社会学之建設	趙承信
鄉鎮社区实地研究之方法	張少微
法国戦時之社会組織	謝徵孚
社会学刊論文與篇幅之分析	龍冠海
国内各大学社会学課程調査	龍冠海
管子の社会思想	龍程美
荀子の社会思想	陳定閔
第六屆年會紀錄	
中国社会学社簡章	

表4-6 社会学刊, 第6巻合刊(1948年1月, 中国社会学社)掲載論文目録

目次	
復刊詞*	孫本文
一個社会学思想之体系—我对社会学之見解—	応成一
人類学上所瞭解的環境勢力	吳澤霖
一個社会学上基本概念之検討	朱亦松
社会学方法論上の幾個問題	趙承信
論民族社会的性質	馬長寿
中国差別生育率之研究	蘇汝江
唐代婦女裝飾風俗考	岑家梧
晚近中国社会学發展の趨勢	孫本文
我国戸籍制度的研究	周榮德
論人力の生産制度	袁 方
呈貢の人事登記	廖宝吟
中国社会学社紀事	

* 孫本文による復刊詞を次に訳出しておきたい。「本刊(社会学刊・・・星挿入)は民国18年7月に創刊され、全国の社会学界の同人のための唯一の共同刊行物です。これまで多年にわたって発表された學術論文は150編を超えています。執筆者の多くは国内の各大学の社会学の教授です。民国26年に第5巻2期を刊行後、抗戦が烈しくなり、本学社の経済的困難によって、刊行を継続できず今日まで休刊してきました。またたく間に10年を超えてしまいました。勝利の後、いくたびかの計画を経て、正中書局が発行を快諾してくださり、ようやく學術界で再びお目にかかれることとなりました。ただ印刷が困難ですので、暫定的に年1巻の合巻とします。情勢が好転しだい、再び季刊に戻します。およそわが社会学界の同人のみなさんには惜しまず、どんどん原稿を送ってくださいようお願いします。これをもって引き続き印刷でき、予定どおり出版できるようになります。期待しています。民国36年12月1日、孫本文識」。

孫本文は社会学刊の一時休刊を、民国26年の第5巻2期としているが、実際にはさらに1期刊行され、民国26年4月の第5巻3期が事実である。孫本文が誤って第5巻2期で休刊としたことで、韓明謨(1987年, 中国社会学史, 天津人民出版社(=星明訳, 2005年, 中国社会学史, 行路社, p. 135)や鄭杭生・李迎生(2000年, 中国社会学史新編, 高等教育出版社, p. 87)らは、いずれも第5巻2期まで刊行されたとしているし、そのうえ1948年1月に第6巻合刊が刊行されたことについては韓も鄭らもまったく言及していない。

区を中心にした東南社会学会から全国規模の中国社会学社に発展した後の第2巻第1期, 学社の経済的困難と抗日戦争によって一時停刊になった時の第5巻3期(1937年4月)そして最終刊となった第6巻合刊(1948年1月)の所載論文を次にあげておきたい。

うえにあげた掲載論文の内容から概ね次のような特徴が読みとれる。1) 社会学の中国化が順次進んでいること。すなわち、外国の社会学の輸入, 紹介の段階から中国の社会的現実それ自体を研究対象にした論考への推移である。2) 1937年の第5巻第3期には、抗日戦争の影

響が色濃くうかがえる。すなわち、論文本数の少なさとその内容（戦時下における中国の組織問題の論稿があること）である。

お わ り に

これまでうで述べてきたことに基づいて解放前の中国の社会学の特徴をまとめるとおおよそ次のようになる。

1) 学術団体発行の雑誌（社会学雑誌，社会学界，社会学刊）には，マルクス主義の観点からの論文が極めて少ないこと（資料によれば，李劍華ひとりに過ぎない）。マルクス主義の観点をもつ社会学者には李達，李大釗，陳翰笙，許德珩，瞿秋白，李平心，馮和法らがいた。しかし，燕京大学の社会学教授の趙承信は，当時の状況を「弁証法的唯物論は青年の学習に大きな影響をもっていた。しかし，これは決して正統ではなかった。唯物論者にブルジョア社会学だと認められるものこそ中国の社会学の正統である。・・・弁証法的唯物は主義の範囲に属し，科学的研究討論ではない。また，ブルジョア社会学はすべて非革命主義であることが，かえって科学的研究だと主張した」⁽³⁸⁾と述べている。

2) 中国の社会学の発展を，日中戦争が大きく妨げたということ。王康（1996年当時，中国法政大学教授，中国社会学会顧問）はかつて筆者に次のように語った。「わたしは18歳の時，武漢で日本軍の爆撃を逃げ回った経験があり，これは忘れられない出来事である。本も読めず，研究もできず，食べるのに精一杯であった」（1996年8月22日，王康教授の北京の自宅にて）⁽³⁹⁾と。妨げた事実として，学術団体の活動の停止，学術刊行物の発行の停止，大学（北京大学，清華大学，南開大学など）の疎開⁽⁴⁰⁾があげられる。

3) 次第に社会学の中国化に向かっていること。すなわち，中国社会を対象にした研究，中国社会の社会調査が増加してきた。

4) 日本の社会学は中国の社会学の発展の翻訳期に積極的影響を及ぼしたこと。つまり，社会学書の翻訳からみると，日本の社会学の中国のそれへの影響は1900年前後から1910年代末まで比較的大きいが，それ以後は欧米の社会学が圧倒的な影響をもつようになった。

〔注〕

- (1) 福武直，1979年4月9日，中国社会学の復活，毎日新聞（夕刊）。
- (2) 福武直，1979年，中国社会学とその復活，福武直編，現代化中国の旅－社会学者訪中団報告－，東京大学出版会，p. 185。
- (3) 福武直，同上，p. 186。
- (4) 韓明謨，2005年，中国社会学名家，天津人民出版社。
- (5) 筆者はこれまでに孫本文については「中国社会学の廃止について－大学改造と反右派闘争のなかでの中国社会学－」（1995年，中国と台湾の社会学史，第3章所収，行路社，pp. 89-116），「新中国成立前後の中国社会学者の状況－孫本文を中心に－」（2004年，社会学部論集，第38号，佛教大

学社会学部, pp. 115-124)で、費孝通については「中国社会学の廃止について—大学改造と反右派闘争のなかでの中国社会学—」, 前掲書, pp. 89-116で論及してきた。さらにまた、費孝通についてはかれの二つの論稿「社会学のために語る」(1957年)(=1991年訳, 仏法と教育の森(久下陸先生頌寿記念), 久下陸先生古希記念祝賀会編(佛教大学), pp. 33-40)および「社会学のために再び語る」(1979年)(=1990年訳, ソシオロジ, 第35巻第1号, 社会学研究会, pp.91-108)を翻訳してきた。

- (6) 孫本文, 1948年, 当代中国社会学, 勝利出版公司, 付録「中国各大学社会学教授姓氏録—以筆画為次包括副教授講師在內—」(1947年12月調査), pp. 319-327から集計した。
- (7) 閻明, 2004年, 一門学科与一個科学—社会学在中国—, 清華大学出版社, pp. 47-50。
- (8) 中国社会学社は、新中国建国後、中国大陆においてその活動を停止した。その後、同学社の活動は台湾にもともと台湾にいた社会学者および新中国成立前後に中国大陆から台湾に渡った社会学者によって引き継がれた。この中国社会学社は1995年に「台湾社会学社」と改名され、その刊行物も1996年の第19期以降「社会学刊」から「台湾社会学刊」に改名された(1995年2月2日, (台湾)中央研究院週報, 第562期)。
- (9) 韓明謨著, 1987年, 中国社会学史, 天津人民出版社(=星明訳, 2005年, 中国社会学史, 行路社, p. 23)。
- (10) 韓明謨著, 1987年(=星明訳, 2005年), 同上, p. 26。
- (11) 李劍華, 1930年, 社会学史綱, 世界書局, pp. 4-6。
- (12) 蔡毓驄, 1931年, 中国社会学的四個時期, 社会学刊, 第2期第3期, 中国社会学社。
- (13) 韓明謨著, 1987年(=星明訳, 2005年), 前掲書, p. 26。
- (14) 韓明謨はその後の著書のなかで、中国の社会学の発展のなかの革命根拠地や解放区の社会調査、中国社会の性質の問題などの論戦および郷村建設運動を社会学の非専門的な範疇に、そして大学と研究組織の社会学を専門的な範疇に分類したが(韓明謨, 2002年, 社会系統協調論—關於社会发展機理的研究—, 天津人民出版社 pp. 6-10)。これはかれの著, 1987年, 中国社会学史, 天津人民出版社(=星明訳, 2005年, 中国社会学史, 行路社)にはなかった新たな観点である。
- (15) 韓明謨著, 1987年(=星明訳, 2005年), 前掲書, pp. 26-27。なお、韓明謨はその後、2度この区分を修正している(韓明謨, 2002年, 20世紀百年学案・社会学卷, 陝西人民出版社, p. 12および2005年, 中国社会学一百年, <http://www.sachina.edu.cn/Htmldata/news/2005/08/356.html>)。第1回目の区分と第2, 3回目のそれとの大きな違いは、第1回目で萌芽期(1911-1918年), 揺籃期(1919-1927年)としたのを第2, 3回目では揺籃期(1911-1927年)として1つにまとめたこと、改革期(1949-1987年)を停滯期に名称の変更を行なったことおよび1979年以降を新たに再建期ないし回復期としたことである。そして、第2回目と3回目との大きな違いは、1979年から現在までの表記である。「再建」(2002年)ではなく、文字どおり「回復」(2005年)としたのである。かつて、王康(1996年当時, 中国法政大学教授, 中国社会学会顧問)は筆者に「1979年に社会学を復活させる時、われわれは社会学の回復という表現を避けて、再建という表現にした」(王康著, 1988年, 談談社会学, 中国社会学の興旺所収, 山東人民出版社(=星明訳, 1997年, 社会学を語る, 佛教大学社会学部論集, 第30号, p. 213)と語ったことがある。
- (16) 張琢, 1992年, 中国社会和社会学百年史, 中華書局(香港), pp. 4-8。
- (17) 劉緒胎の区分は、陳樹徳, 1989年, 近年来中国社会学史研究概述, 中国社会科学院社会学研究所編, 中国社会学年鑑1979-1989, 中国大百科全書出版社, p. 89から転載。
- (18) 龍冠海, 1968年, 社会学, 第4版, 三民書局(台湾), pp. 379-394。
- (19) 星明, 1995年, 中国と台湾の社会学史, 行路社, pp. 3-4。
- (20) 黄紹倫, 1992年, 社会学的中国化, 李明堃・黄紹倫主編, 社会学新論, 商務印書館(香港), pp. 59-68。

- (21) 韓明謨著, 1987 年 (=星明訳, 2005 年), 前掲書, pp. 86-201, pp. 241-244。
- (22) 孫本文, 1948 年, 前掲書, 付録「中国社会学重要文献分類簡表」, pp. 287-318。
- (23) 韓明謨著, 1987 年 (=星明訳, 2005 年), 前掲書, pp. 137-140。
- (24) Wong Siu-lun, 1979, *Sociology and Socialism in Contemporary China*, Routledge & Kegan Paul, p. 5 および Li Hanling, Fang Ming, Wang Ying, Sun Bingyao and Qi Wang, 1987, *Chinese Sociology: 1898-1986, Social Forces*, vol. 65, no. 3, p. 613。
- (25) 孫本文, 1948 年, 前掲書, p. 34。
- (26) 韓明謨, 1991 年, 中国社会学会, 中国大百科全書総編輯委員会《社会学》編輯委員会, 中国大百科全書 (社会学), 中国大百科全書出版社, p. 488。鄭杭生・李迎生, 2000 年, 中国社会学史新編, 高等教育出版社, pp. 83-84。
- (27) 鄭杭生・李迎生, 同上, p. 83 によれば, 第 3 卷 3 期ではなく, 第 3 卷第 2 期となっている。
- (28) 中国社会学会が刊行した社会学雑誌の停刊年は, 文献によってさまざまに異なる。つまり, 韓明謨は 1932 年 11 月の第 5 卷第 4 期 (韓明謨著, 1987 年, ((=星明訳, 2005 年, 前掲書, p. 84))), 傅懋冬は 1933 年 3 月の第 5 卷第 7 期 (傅懋冬, 1991 年 a, 社会学雑誌, 中国大百科全書総編輯委員会《社会学》編輯委員会, 中国大百科全書 (社会学), 中国大百科全書出版社, p. 347), 鄭杭生・李迎生ら年代はあげていないが, 第 3 卷第 3 期だという (鄭杭生・李迎生, 2000 年, 前掲書, p. 83)。
- (29) 傅懋冬, 1991 年 a, 同上, p. 347。
- (30) 韓明謨著, 1987 年 (=星明訳, 2005 年), 前掲書, p. 84。
- (31) 鄭杭生・李迎生, 2000 年, 前掲書, p. 83。
- (32) 鄭杭生・李迎生, 同上, p. 85。
- (33) 楊雅彬, 1987 年, 中国社会学史, 山東人民出版社, p. 73。
- (34) 傅懋冬, 1991 年 b, 社会学界, 中国大百科全書総編輯委員会《社会学》編輯委員会, 中国大百科全書 (社会学), 中国大百科全書出版社, p. 343。
- (35) ここでは Raymond Firth の「中国農村社会団結性的研究—一個方法論的建議—」は費孝通によって中国語訳されて掲載されており, その日本語訳は西澤治彦によってなされている (西澤治彦, 2000 年, 文献紹介: 民国期における中国社会学への二つの建議, 武蔵大学人文学会雑誌, 31 卷 3 号, pp. 480-435)。
- (36) 韓明謨, 1991 年, 前掲論文, p. 488。
- (37) 傅懋冬, 1991 年 b, 前掲論文, pp. 343-344。
- (38) 趙承信, 1948 年, 中国社会学的两学派, 益世報・社会学研究, 第 22 期。ただし, ここでは, 韓明謨著, 1987 年 (=星明訳, 2005 年), 前掲書, p. 143 から再引用。
- (39) 王康著, 1988 年 (=星明訳, 1997 年), 前掲論文, p. 214。
- (40) 北山康夫, 1987 年, 中国の大学と日中戦争—西南連合大学を中心として—, 大阪教育大学歴史学研究室, 歴史研究, 第 24 号, pp. 29-44。北山は同論文のなかで, 31 大学の疎開を「図説・長征する大学」としてリストアップしている。

〔付記〕

本稿は佛教大学の 2001 年度海外研修の研究成果の一部である。記して感謝する次第である。

(ほし あきら 現代社会学科)
2005 年 10 月 19 日受理